

新吉は一番端の上の寢臺の梯子を踏んで上つて仰向けにねた。

そして緑色のカーテンを下ろして垂れ下らした。

素知らぬ顔で居た。

ブーブーと最々汽車が警笛を鳴らした。

青いシグナルは霜と立話しをしてゐた。

人間の肉體は枕木にならない事を新吉は想像した。

山陰道の海岸傳ひにも、列車がトンネルに向つて夜這ひをしてゐる。

乗務車掌の中にも氣の利いた男はゐた。

貨物列車の中には豚や牛が折々積み込まれる。

新吉は何處だかの驛で、洗面機を二つ三つ投げ飛ばしたり、押し車を線路の上へ轉がし込んだ

り、盛んに暴行を働いて、刑事や驛員に擔がれて尙も荒れ狂ふた。

一睡もしなかつた。

四五人が腰掛けられる列車中の掃除夫の休憩室みたいな所へ這入つて行つて『刑事が俺を下車